北海道旭川工業高等学校

課　程：　定時制
学　科：　工業科
生徒数：　７３名

１　取組の特徴

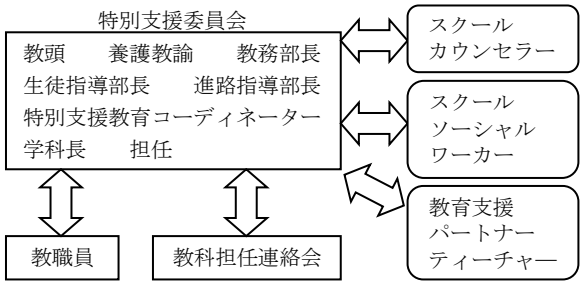
１年生を中心に予防的・開発的カウンセリングを実施し、より良い人間関係を形成する力やコミュニケーション能力の育成と向上を図り、いじめや中途退学の未然防止に取り組む。

２　取組のねらい

本校に入学してくる生徒は、中学校時代にいじめや不登校、学業不振、人間関係、学校生活に課題や困難を抱えている生徒が多く低学年の中途退学者も多い。

こうした生徒たちに構成的グループエンカウンターなどの集団カウンセリング授業を実施して、より良い学級づくりを行う。また、学校生活に対する不適応の解消を図りながら、中途退学者の更なる減少に取り組む。

＜組織図＞



３　取組の経過

４月　特別支援委員会
５月　生徒実態把握調査
　　ほっと①、アセス①
７月　集団カウンセリング授業①
８月　集団カウンセリング授業②
１０月　コミュニケーション・トレーニング
　　（宿泊研修）
１１月　集団カウンセリング授業③
１２月　ほっと②、アセス②

４　取組の内容

１　集団カウンセリング授業

ア　ねらい

コミュニケーション能力や対人スキル、自己有用感などを身に付けて自己実現を図る。

イ　対象

電気科１学年、建築・土木科１学年　合計２０名

ウ　内容

本校のスクールカウンセラーで臨床心理士の寺崎慎一郎氏を中心に、本年度３回実施している。集団カウンセリング授業を通してコミュニケーション能力の育成と向上を図った。生徒、大学生（北海道教育大学旭川校）、本校教員で４つのグループを作り授業を展開した。宿泊研修においてもネイパル深川の職員の協力によりコミュニケーション・トレーニングを実施した。

エ　成果等

○集団カウンセリング授業に参加して「楽しかった」「班で協力して考えることができた」など好意的な意見が多かった。本校はクラス替えがなく、同じ学年であっても他のクラスとの交流があまりないため、集団カウンセリング授業によって、クラスの枠を超えた交流ができたことはコミュニケーション能力の向上に効果的であった。

4　取組の内容

○ある学級では「ほっと」の１回目と２回目を比較した結果、「参加（仲間づくり）」「配慮（思いやり）」「拒否（拒否）」のスコアが上昇した。授業のねらいである「参加」や「配慮」が上昇したことから、効果的な取組であったと考えることができる。

●個別に見るとほとんどの要素でポイントが下がった生徒もいる。ポイントが下がった生徒については特に注意深く見守る必要がある。

●別の学級では１回目と２回目の結果であまり変化が見られなかった。実施方法や分析内容について今後も検討していく必要がある。

オ　授業の流れ

【１回目】７／２１
(1) 自己紹介
(2) アイスブレイク
「イチポン」
(3) プログラム①
「印象判断」
休憩（給食）
(3) プログラム①
「印象判断」
(4) 全体シェアリング
(5) 振り返り（感想）

【２回目】８／３１
(1) アイスブレイク
「小さい頃の遊び場を作ろう」
(2) プログラム①
「あいてのいいところを探そう」
休憩（給食）
(2) プログラム①
「あいてのいいところを探そう」
(3) プログラム②
「言葉を使わないで伝えよう」
(4) 全体シェアリング
(5) 振り返り（感想）

【３回目】１１／１８
(1) アイスブレイク
「イチポン」
(2) プログラム①
「あなたは地球を救う調査隊の一員」
休憩（給食）
(2) プログラム①
「あなたは地球を救う調査隊の一員」
(3) 全体シェアリング
(4) 振り返り（感想）

カ　授業の様子

【イチポン】

【小さい頃の遊び場を作ろう】

【印象判断】

【あなたは地球を救う調査隊の一員】

キ　生徒の感想

・様々なゲームをして、友達との「絆」が深まった。（１回目）
・あんまりなじめなかった。もっとみんなと話したいと思った。（１回目）
・印象判断では、外見だけでは分からないことがあった。楽しく参加することができた。（１回目）
・３回とも参加したが、３回とも楽しかった。大学生とも仲良くなれてよかった。（３回目）
・前回はグループでゲーム形式の内容が多かったが、今回はグループでの話合いが多いと感じた。グループのメンバーが３回とも異なっていたのでいろんな人と話すことができた。（３回目）
・グループで協力しながら、様々な物を探したり、考えたり、普段、あまり話す機会のない人とも人間関係を深めることができたと感じた。ありがとうございました。（３回目）

５　次年度に向けて

１　成果

(1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移

本年度の中途退学者は学校全体で５名、１年生については２名（昨年度同様）となっており、過去数年間の中途退学者の数と比べ、明らかに減少している。

(2) その他の指標による評価

「アセス」や「生徒実態把握調査」を全校生徒で実施することにより、生徒の悩みを早期に把握し、的確な支援の方策を立てることができた。

(3) 「ほっと」の実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

学級全体で見ると、ほぼ平滑で特段の課題は見当たらないが、個々の生徒の結果には差があり、生徒一人一人に対して、注意深く見守る必要がある。

(4) 生徒の変容した姿

中学校時代に不登校だった生徒が多数いるが、現在では、ほとんど学校を休むことなく登校できるようになった。

２　課題

(1) １年生が入学して間もない４月から５月に集団カウンセリング授業の１回目を実施する必要があること。

(2) 生徒の実態に応じて、分かりやすい授業となるよう内容や指導方法を改善する必要があること。

３　次年度に向けて

(1) １年生の４月から５月に集団カウンセリング授業の１回目を実施し、望ましい人間関係の構築を図る。

(2) 生徒の実態に応じて、分かりやすい授業となるよう、授業改善の取組を推進する。

北海道苫前商業高等学校

課　程：　全日制
学　科：　商業科
生徒数：　５９名

１　取組の特徴

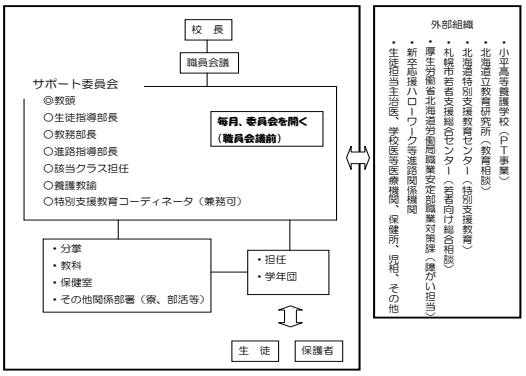
本校は地域キャンパス校の特徴を生かし、遠隔授業システムを活用した授業を実施している。また、地理的条件からカウンセラー等の派遣は頻繁にはできない状況にあるため、カウンセラー等の専門家が実際に来校しなくても、遠隔システムなどＩＣＴを活用したカウンセリングや教員の研修をとおして、教員のスキルの向上に努めている。その結果、生徒一人一人の日常における心の動きを教員全員で把握し、問題行動等の未然防止や早期解決に向けて取り組んでいる。

２　取組のねらい

遠隔システムを活用し、生徒理解のための教職員研修を深めるとともに、「ほっと」「アセス」の分析について研修を進め、教員のスキルアップを図る。

また、生徒の自尊感情やコミュニケーション能力を育てる活動を実践するための体制づくりを促進する。

＜組織図＞



３　取組の経過

４月・新入生及び在校生の情報共有
・校内研修（生徒理解）
・校内研修（教育相談週間に向けて）
・校内生徒サポート委員会（毎月１回）
・宿泊研修「リレーションとルール構築」のための活動（場所：ネイパル深川、講師：ネイパル深川職員）
・「ほっと」実施

５月・「苫商トーク」（教育相談週間）

６月・「アセス」実施
・校内研修（生徒理解、「ほっと」「アセス」実施結果）
・ボランティア活動（町内施設清掃、縦割り班編成）

11月・カウンセリング(スクールカウンセラー)
・管内教育相談研究会（遠隔研修）「教育相談担当者の役割と『ほっと』『アセス』活用」
講師：北海道立教育研究所研究･相談部
秋里　泰紀　研究研修主事
・校内研修（思春期における生徒理解と支援）
講師：名寄市立大学保健福祉学部教授
小銭　寿子氏

12月・「ほっと」「アセス」実施

１月・校内研修（生徒理解、「ほっと」「アセス」活用）
・「苫商トーク」（教育相談週間）
・カウンセリング(スクールカウンセラー)

２月・カウンセリング(スクールカウンセラー)
・ボランティア活動（町内除雪、縦割り班編成）
・カウンセリング(スクールカウンセラー)

【外部講師による校内研修】

4　取組の内容

1　宿泊研修における「リレーションとルール構築」を促す活動

ア　ねらい

レクリエーション的要素の強い活動をとおして、学年の中で話しやすい雰囲気を作るとともに、人間関係の構築や集団行動を行う上での規律の理解など、好ましい学年集団づくりに向けた基盤を整える。

【宿泊研修での人間関係づくり】

イ　対　象

１学年

ウ　内　容

レクリエーション的活動をとおして、他人と接することの楽しさや接する際の留意点を理解したり、ルール構築のために必要なことを具体的にイメージしたりできるよう働きかけを行った。

エ　成　果

活動をとおして、笑顔で活動する生徒が多くなるなど、実施前の硬かった雰囲気がやわらぎ、人間関係づくりに役立った。その後のプログラムでは、主体的に級友と関わろうとする生徒が増えるなど、宿泊研修の目的の達成に繋がった。

今後は、これらの取組が年間をとおして計画的に推進できるよう、各取組の位置付けを明確にしていくなどの工夫に努める。

2　「ほっと」「アセス」の結果の活用に関する校内研修

ア　ねらい

客観的な検査結果を解釈し、日常の指導に生かす。

【遠隔システムを活用した研修】

イ　対　象

本校教職員

ウ　内　容

６月に実施した「ほっと」に係る校内研修で、参加者から「結果をどのように生かせばよいのか分からない」という意見があったことから、11 月に北海道立教育研究所の秋里泰紀研究研修主事による「ほっと・アセスの生かし方」をテーマに、遠隔システムを活用した研修を実施した。また、遠隔研修を踏まえた校内研修を、１月に再度実施した。

【演習内容】

①　データを無記名で提示して分析し、対策を立てる。

②　生徒氏名を公表し、日常の観察による把握状況と併せて再度分析し、対策を立てる。

③　特に問題がないと捉えていた生徒が不登校になったケースを事例として、教職員が問題視していなかった時期の検査結果を考察する。

エ　成　果

主観的理解と客観的理解によるデータの活用方法等について理解を深めることができた。

５　次年度に向けて

１　成果

ア　中途退学者数及び不登校生徒数の推移

	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
退　学	2	0	4	0	2	3	0	2	1
不登校	0	0	0	0	0	0	0	0	0

イ　「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

・２学年は、「礼儀」「表明」に比べ、「参加」「配慮」が低いことから、自分の気持ちを表現することはできるものの、相手への配慮を言葉にすることが難しく、ギスギスした人間関係が生じやすい状況である。

・１学年は、「参加」「配慮」に比べ、「礼儀」「表明」が低いことから、相手への配慮はできているものの、自分の気持ちを表現することが苦手な傾向がある。また、集団関連項目も低く、集団行動時のトラブルも起きやすい状況である。

ウ　生徒の変容した姿

・１学年の宿泊研修での「リレーションとルール構築のための活動」により、その後のプログラムで自ら級友と関わろうとする生徒が増えた。

・スクールカウンセラーからカウンセリングを受けた生徒は、学校以外の異なる立場の人に自己の悩みを相談することにより、自己理解を深めるきっかけとなった。

２　課題

ア　悩みを抱えている生徒本人だけではなく、その生徒を取り巻く集団への支援が必要である。

イ　構成的グループ・エンカウンター等のＳＳＴに対する教員の共通理解を図る必要がある。

ウ　集団を育てるための活動を検討し、年度計画に位置付ける必要がある。

３　次年度に向けて

今年度は、講師との都合が合わなかったことから、予定していたグループカウンセリングができなかった。次年度は遠隔システムを利用した生徒向けカウンセリングも含めた実施を検討したい。